

教育広報

相 双

第127号

令和5年2月20日発行



相双教育事務所
次長兼学校教育課長
佐藤 公一

「そのときの
雰囲気を探る」

以前勤めていた学校で行われた芸術鑑賞教室での話です。その時は「落語」を楽しく鑑賞させていただきました。実は落語そのものよりも解説の「落語では、本題の演目に入る前に、時事ネタなどを話しながら観客の雰囲気や反応を探り、その日の演目を決めるのです。」という話が印象に残りました。嘶家が演目の引き出しを多く持っていることはプロとして当然なのでしょうが、高座に上がってからのその場の雰囲気などから観客にうける落語を選択していることは驚きでした。

観客の雰囲気については、年末のM-1グランプリでも話題になっていました。思ったほど得点が伸びなかった漫才師に対し、司会者も審査員も「気の毒な順番でしたが…」など、発表順による勝負の有利不利について述べている場面がありました。たとえ自信のあるネタであっても、前の発表者がどんなネタだったのか、その時の観客の雰囲気や反応はどうなのかによって、同じ漫才でもうける具合が変わってくるようです。

学校の授業で似たような経験をしている教員も多いのではないのでしょうか。私は中学校で主に理科の授業を担当してきましたが、同じ発問、同じ教材や実験でも、クラスや時間帯によって生徒の雰囲気や反応は違いました。「前のクラスでは手応えがあったのに、今回は全然生徒とかみ合わない」と落ち込んで授業を終えたことは何度もあります。「これはおもしろいぞ」と意気込んで準備しながら撃沈した教材も数えきれませんし、逆に思いつきの問いかけが教室中の激論に発展することもありました。

ところで、令和四年度相双教育アピール「新しい学びのかたちを相双から」の表紙には「目指すべき相双の教員像」が九つ載っています。その中の一つに「柔軟な発想をもち、一人一人の学びに寄り添う教員」というものがあります。嘶家がそのときの雰囲気を探り、その場の観客に合った演目を選んでいる例を挙げるまでもなく、この場合の目指す教員像のイメージは「目の前の一人一人の子どもたちにとって最適な学習を実現できる柔軟さと引き出しと判断力を持った教員」ということになるのだろうと思います。

各学校では、これを受けて学校や地域の問題等について情報収集して話し合い、具体的な課題を設定します。その



南相馬市教育委員会
教育長 大和田 博行

◇教育随想◇
「スクールチャレンジ
南相馬市大会」

本市では、二〇一七年度からソフトバンクロボティクス社のご支援により、Pepperを使ってプログラミング教育に取り組んでいます。そして、毎年開催される同社主催のプログラミング成果発表全国大会（STRAMAチャレンジ全国大会）の予選を兼ね、日頃子どもたちが学んできたプログラミング学習の成果を発表するとともに、他校の取り組みを知る場としてスクールチャレンジ南相馬市大会を実施しています。本年度のテーマは全国大会と同じ「テクノロジーでSDGsに貢献する」です。

いくつかを紹介すると「地域のお年寄りに元気を届けよう・Pepperと一緒に体を動かそう」「仲間外れをなくしよりよい学校にしよう」「『ふくしまゼロカーボン推進を目指して』自分たちができる環境保全を考えよう」などです。次に、Pepperのデータ処理、映像表示、話す、動く等の中からの機能が課題解決に最適かを話し合い、そのためのプログラムを作成していきます。担任やICT支援員に教えを乞うだけでなく、先行事例を調べ、地域の方の協力を得るなど必要に応じて学校外の方々の力を借りて、よりよいものにしていきます。そして、実際に動かして不具合を修正し、論理的・効率的なプログラムにしていけます。さらに、大会での説得力ある発表に向けて資料を作成し、練習を重ね校内でリハーサルも行います。

当日の発表はどの学校も素晴らしい、甲乙つけがたいものでした。そして、子どもたちの柔軟な発想や自信に満ちた態度、チャレンジ精神に、あらためて無限の可能性を感じました。教育委員会としても、柔軟な発想で子どもたちを支援していきたいと思

新しい学びの
かたちを
相双から

「AIに負けない
読解力を鍛える」

相馬市立桜丘小学校
教頭 加藤 政記

本校は「AI時代を生き抜く読解力向上事業」の研究協力校として、児童の汎用的読解力向上につながる指導法の研究に取り組んできました。実態を把握するために活用したのが、リーディングスキルテスト(以下、RST)です。教師もRSTを受検しました。自身の読解力の低さに肩を落とした方も少なくありません。しかし、それ以上の衝撃だったのは「学級の約九割の児童は、教科書を正確に読めていない」という事実でした。私達が根拠もなく抱いていた「子どもたちは読めているだろう」という考えを否定することから授業改善が始まりました。

省略されている語句がたくさんあること等、学年間で教科書の解釈を交流し教材研究をしました。それでも、授業では予想しない反応が出てきます。「糖分を絞られた後のさとうきびは、発電の燃料や畑の肥料などとして使われます。さとうきびは、すてる場所がありません。」を讀んだ後、ある児童が次のようにいいました。「捨てる場所がないからゴミがいつばいになって困るよね。」児童のつまずきが見えるでしょうか。研究の初期は、児童の誤読に対して教師が一生懸命に説明をしていました。しかし、それでは児童の変容にはつながらないことを学びました。児童が、誤読していることを実感できないためです。そのため、授業の中で教科書の文章を読み解く時間を確保し、解釈を伝え合う場を設定していきました。すると、児童が、教科書を基に学び合うようになってきました。今では、国語で身に付けた読解方略(線を引く、図に表す等)を、他教科等での学びで活用する児童が見られるようになりました。

授業改善は、児童の読解力向上と共に、ゆつくりと確実に進んでおります。二年生の男の子が掲げた三学期の目標は「読解力をあげる」でした。この児童が目標を達成できるように、今後も児童の読解力に寄り添いながら、言葉を大切にされた教育を進めてまいります。



【読解方略を使って教科書を読み解く】

「町と関わる」

双葉町立双葉中学校
教諭 菅野 知加子

双葉町は昨年の八月末に一部区域の避難指示が解除され復興に向けて、大きく動き始めました。そこで「双葉のいま」町に行つて知ること、感じること「学ぶこと」をテーマに、変化していく町の様子を実際に見ることで、生徒たちが町に対する思いやこれからの自分の生き方を考える機会として、ふるさと創造学に取り組みました。

いわき市の仮設校舎で学校生活を送っている生徒が、双葉町を自分事として捉えることができるよう、インターネットや資料を活用して町の現状を調べるだけでなく、実際に町で営業を再開した方からその思いを聞く活動を取り入れ、意欲付けを図りました。

そして九月には二日間におたつて町を訪問し、学習を深めました。町職員の案内で町内を歩き、歴史や震災当時のこと、現状等について説明を受けました。町内は新しい駅舎や役場新庁舎など、新しい建物がある一方、震災当時のままの建物が混在しており、その状況を見て、それぞれに思いを話していました。新庁舎での町長との懇談では、町の現状等、詳しく説明を受けました。生徒たちは町づくりに関して積極的に質問をするなど、関心をもって取り組んでいました。そして中学校本校舎へ。卒業生である本校教員の説明を真剣に聞く姿は印象的でした。昇降口や図書室、PC室は物が散乱したままの状態、地震の大きさに驚くとともに十年以上もそのままになっていることに心を痛めた生徒もいました。他に原子力災害伝承館や産業交流センターの施設を見学し、復興に

関わっている方々の話を聞き、町への思いを深めました。生徒たちはこれまでの学習を振り返りながら、新たな疑問や課題を見つけることができ、それらをまとめ、自らの考えをもって文化祭やふるさと創造学サミットで発信することができました。今回、初めて町を訪れた生徒がほとんどでしたが、現状から感じ取ったこと、学んだこと、さらに生徒一人一人がどのように町に関わっていきたいのかを考える機会となりました。



【双葉町の校舎を見学する双葉中学校の生徒】

【電子版】



こちらからもお読みいただけます

「資質・能力を育む」 『単元研究会』の実践」

福島県立相馬支援学校

教諭 富村 和哉

令和四年度から国立特別支援教育総合研究所の研究協力校として委嘱され「知的障害教育における授業づくりと学習評価に関する研究」に取り組んできました。

本校では、令和二年度より、平成二十八年中央教育審議会が指摘していた「授業研究会が一時間、一時間という狭い範囲に留まっている」という課題を受け、資質・能力を育む観点から、その鍵となる単元に着目し、単元全体を研究する単元研究会を行ってきました。その際、参加者の主観的な学習評価にならないように、研究授業時の対象生徒の言動が記録してある学びの記録を参考に、複数の視点で、文部科学省が示す学習評価参考資料に基づいた評価規準に従って、学習評価を行いました。その後は、授業改善の視点を置いて、どのような子どもたちの学びを実現していくと、さらに資質・能力を育成していかれるのか話し合ったり、単元構想全体の構成の在り方や他教科等のつながりを考え

たりするなど、本時だけでなく、単元全体の視点をもってアイデアを出し合いました。



【単元研究会で意見を交わす先生方】

授業者からは「目標を立てた時点での生徒の姿と評価後の生徒の姿では、若干の開きがあった。単元のまとまりの中で生徒の姿を明確に捉えながら授業を行わなければならぬ」ということを実感できました。「重度重複障がいのある生徒の授業の在り方等を考えていくよい機会となりました。今後は、教師側がしっかりと目標を設定して、そこにどう迫れるか、教科の力は身に付くことができたのか、評価は後付けになっていないか、見方・考え方は働かせていたかなど、真摯に向き合い、指導と評価を行っていきたいです。」等、学習評価が授業改善につながる

ることを実感し、日々の授業・単元構想に生かす様子が見られました。それと同時に、子どもたちが学ぶ姿も変わってきたように思います。今後も、単元研究や学習評価を踏まえながら、子どもたちの学びに向き合い、資質・能力を育成できるように励んでいきたいと思えます。

「北から南から」 ―各学校の実践より―

「しみじみマスタープロジェクト」
がスタート

飯館村立いたて希望の里学園
校長 山田 徹

「ごんぼっぱって、抹茶みたいな香りがする。」
飯館村の伝統食「凍み餅」に使われているごんぼっぱ（別名ヤマゴボウ）の加工を体験した三・四年生が、目を輝かせて発言していました。
本校では、村の食文化を継承するため、凍み餅に使われている食材の栽培、それらを生かした凍み餅の加工・調理までを体験的に学ぶ「しみじみマスタープロジェクト」をスタートさせました。

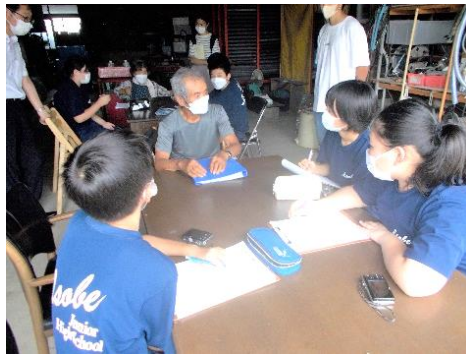


【「ごんぼっぱ」の下拵え作業】

前期課程では、全児童で「里山のつぶ」の田植え・稲刈りを体験。その他に低学年がサツマイモ・トウモロコシ、中学年がごんぼっぱ、高学年がエゴマ・大豆を栽培し、自分たちが育てた食材で凍み餅づくりを体験しています。後期課程では、凍み餅の「過去・現在・未来」について探究し、九年生は凍み餅普及のための商品開発まで手掛けています。村の達人との交流を通して、ふるさとと良さを体験し、村の食文化について学びを深めています。
二月には、手作り凍み餅とオリジナルレシピを、九年生が開発したパッケージに入れて鹿児島県の小学校にプレゼントし、オンライン交流を通してさらに学びを深めています。
「磯部なんて何もないのに。」
転校生が来ることを知った時の生徒の言葉でした。
本校の一年生の総合的な学習の時間は「地域学習」ですが、この一言が気になっていました。
総合的な学習の時間でのフリーペーパー作りは、NPO法人『Mirai』の皆さんのお力を借りました。課題設定・情報の収集・記事の編集・構成などの方法を学ぶとともに、地域の方々にはインタビューに丁寧に答えていただいたり、ホッキ貝の調理やトマト栽培について教えていただいたりしました。
最初は最終的な形を思い描けずに戸惑っていた生徒たちでしたが、次第にレイアウトにまで凝り出し、時間を延長するほどでした。完成したフリーペーパーを手にした時の「うわあ」という驚きと喜びの声が忘れられません。
私は東日本大震災直後に小高中に転勤し、故郷を失った生徒たちが合唱曲『群青』によって自分の思いを発信する姿を目の当たりにしました。

「ふるさと磯部を発信」
相馬市立磯部中学校
教諭 斎藤 直樹

生徒たちの姿がああ時の生徒たちと重なってきます。故郷に誇りを持ち、自分の思いを発信することをこれからも続けてほしいと願っています。



【地域の農家さんにインタビュー】

「専門高校による小中学生体験学習応援事業」

福島県立小高産業技術高等学校
電気科 教諭 榎田 古瀬

この事業は専門高校を見学し、体験活動を行うことで、様々な進路があることを知り、自己の将来に結び付けることを目標に実施されています。当日は来校した小高小・中学生に対して、本校生徒が講師として技術指導をしました。本校は工業科と商業科に分かれており、様々な体験をすることが出来ます。工業科では「二次元CAD」「ミニソーラーカー」「電子回

路製作」「葉脈しおり作成」等を実施しました。参加者は3Dプリンタでの造形や光センサを利用したオルゴール製作で形が出来上がっていくことに感動していました。商業科では「将来のお金について考えよう」「パッケージデザイン」を実施しました。参加者はペットボトルラベルのデザイン作成を体験し、自分だけの商品設計に想像力を膨らませていました。講師を務めた高校生が「元気がよく楽しんでくれて嬉しかった」「教える事の大変さが分かった」と話す姿が見られ、コミュニケーション力の大切さを改めて実感していました。

【令和四年度「ふくしまを十七字で奏でよう絆ふれあい支援事業」入選作品】

最優秀作品（ふるさと部門）

野馬追で 中村二中 二年 岩本 瑠華
父の背を見て あこがれを
いつの日か 父 岩本 宏美
親子で出たい 夢語る

佳作作品（ふるさと部門）

鹿狼山 尚英中 二年 高野 明飛
山頂からの 良い景色
移り行く 母 高野 洋子
ふるさとの景色 知る山よ

佳作作品（絆部門）

夏祭り 原町二中 三年 山岸 明
父の浴衣で 気合い入れ
浴衣着に 若き自分を 重ね見る
父 山岸 光男

佳作作品（絆部門）

色白な 原町三中 二年 村田 絢音
兄の腕見て 嫉妬する
日焼け肌 兄 村田 一真
努力の証 気にするな

【編集後記】

南相馬市原町区にある駄菓子屋さんの店内で「太田小学校、スクールチャレンジ全国大会出場おめでとう」の張り紙を見つけた。店員さんに話を聞くと、子どもたちが何度も取材に訪れ、故郷の魅力を見つけ発信しようとする姿が嬉しかったとのこと。南相馬市内の魅力調べ、Pepperにプログラミングする技術や企画力は勿論ですが、自分の肌で感じたお店の魅力を「戦争も震災も乗り越え、八十年以上続くお店を支える『人の真心』」と表現する子どもたちの豊かな感性もすばらしいと思いました。子どもが「夢中」になって活動し、試行錯誤する姿に大人が魅了され、地域に活力を与える。困難な状況を地域と共に乗り越えてきた相双地区だからこそ大切にしてほしいエピソードですね。今後も域内の価値ある教育活動を紹介していきます。お忙しい中、寄稿していただきました皆様には心より感謝申し上げます。

高校生の熱き思いを感じて

十月一日(土)、南相馬市小高区の浮舟文化会館において「ビブリオバトル浜通り地区予選会」を開催しました。当日は、相双域内の高校生が九名、いわき域内からは十名が参加し、おすすめの本を感性豊かに発表しました。また、地域住民を始め約一〇〇名の観戦者が集まってく



【三次元CADを使ったモデリング】

ださいました。観戦者からは「高校生が本と出会い、自分を深めている姿に感心しました。」「私も久しぶりに本を読んでみようと思いました。」「など、高校生への温かいメッセージが寄せられました。当予選会は、高校生と観戦者がビブリオバトルの目的である『人を通して本を知る、本を通して人を知る』を共感できた、とても心地よい時間・空間となりました。



【熱心に発表する高校生の参加者】